博士（文　学）　ラムスーレン　ムフェルデン

学位論文題名

Mongolian Identity and Nationalism Orgin, Transformation and Nature (from thirteenth century to mid-1920s)

（モンゴル・アイデンティティとナショナリズムその創造、変容と性格（13世紀から1920年代半ばまで））

学位論文内容の要旨

本論文は、モンゴルにおけるアイデンティティとナショナリズムの誕生と変遷を、さまざまな歴史記述に用いられた言葉とその用法を、歴史的時代区分において再構成し分析することによって、明らかにしたものである。研究対象とされた時代は、最初のモンゴル文字資料があらわれ、統一国家が生まれたのちにモンゴル帝国へと発展した１３世紀初頭から、内部分裂と中国などによる支配の時代を経て、統一国家の建設を目指すボグド・ハーンを皇帝とする独立国家が再建された１９２０年代半ばまでとなっている。モンゴルは１９２４年のボグド・ハーンの死ののち、ソ連の衛星国家としてのモンゴル人民共和国へと改称され、ソ連邦崩壊の１９９０年代を迎える。本論文は、研究対象を統一国家の建設からソヴィエト化までのモンゴル・アイデンティティとナショナリズムに限定することで、現代のモンゴル・ナショナリズムを相対化する、基本的枠組みと視点を得ようとするものであり、ムフェルデン氏の現代へ至るモンゴル・ナショナリズム研究の序章的性格を持っている。

本研究では、各時代に編纂された主要なモンゴル語の歴史記述から、モンゴル・アイデンティティとナショナリズムの鍵となると考えられる主要なモンゴル語を選び出し、４つの時代区分における歴史的文脈で、その固有の意味を分析している。その結果、ムフェルデン氏は、ある時代において重要な言葉には時代特有の概念と用法があり、それらを歴史的文脈において言説分析することによって、モンゴル人の集合的アイデンティティとナショナリズムの創造と変容を、歴史的プロセスとして理解することができると考える。

このような検討と言説分析をおこなった結果、ムフェルデン氏は、モンゴル・アイデンティティの形成と変容において鍵となるのが、「文化(culture)」と「国家(state)」に対応する諸概念であるとする。これらの概念が意味する機能と次元は大きく異なり、一方の「文化」に関する諸概念が、「所与の自然」や「参照基準」として、個人のアイデンティティの基盤と限界を示すのに対して、「国家」に関する諸概念は、強制的な「参照基準」を人々に与え、政治的・現実的には創造的機能をもっている。そして「国家」は、均質化を実現し「文化」の維持と永続の場を与えるために、「国家」がなければ、モンゴルの「文化」やアイデンティティは継続できない。このような概念の誕生、変遷、あるいは相互作用を、

歴史的な時代区分にそって言説分析することによって、モンゴル・アイデンティティとナショナリズムを歴史的に再構成するのが本研究の方法である。

ムフェルデン氏は、このような研究の結果、モンゴルにおける国家は、チンギス・ハーンのリネージの存在に大きく依存してきたとする。出自集団としてのチンギス・リネージとそれに関する用語や概念は、モンゴル人のアイデンティティをナショナリスト的に構築する青写真となってきた。チンギス・リネージは、一般的なモンゴル人にたいして神聖で不滅の国民性（nationality）という意識をあたえ、モンゴル・アイデンティティの存在は、モンゴル・ナショナリズムの源泉として機能してきた。言い換えれば、チンギス・リネージをはじめとして、その後のラマ教や政治形態など、モンゴル固有の「文化」を介して表象されるモンゴル性によって、モンゴル人はアイデンティティを不断に創造あるいは再構築し、その上で生み出された「国家」は、「文化」の実現される場を生みだしてきたと言える。このような観点から、以下の通り各時代におけるアイデンティティやナショナリズムに関連するモンゴル語と概念をその時代区分において分析し、その意味や解釈の変遷を具体的に辿る。

本論文の序章では、研究の目的と理論的な枠組みとしての、解釈学、言説分析理論、ナショナリズム理論の妥当性が述べられ、そののちに、対象とされた歴史記述資料についての説明が行われる。さらに先行研究が批判的に概観される。つぎに、具体的な資料の分析がおこなわれる。

第１章では、民族・文化的な均質性を持つ統一体としての、モンゴル連邦（United Mongol States, *Qumuq Mongqol Uls*）やモンゴル帝国（Mongol Empire, *Yeke Mongqol Uls*）が、チンギス・ハーンなどによって作られた１３世紀から１４世紀を対象とする。この時期には、モンゴルを帝国内の他地域と区別するとともに、モンゴルの集合的アイデンティティ形成に「国家」（statehood）と「文化」が重要であることが強調される。第２章では、モンゴルが明に破れ分裂割拠となった１５世紀から１７世紀を対象とする。この時代には、モンゴル国（*Mongqol Ulus*）の呼称は政治的より文化的リアリティを示すようになり、継続して用いられる創生神話は、モンゴル貴族の祖先につらなる出自集団（*oboqtan*）をモンゴル人そのものと同一視するようになる。第３章では、モンゴルが清朝支配下に入った１７世紀から１９世紀後半の外モンゴルが対象とされる。この時期にモンゴルは中国による政治的支配を受けたが、共通の祖先を持つ特殊な集団であると理解されるようになり、モンゴル人の国家（*uls*）は、民族＝文化的統一体として再解釈されるようになる。

第４章では、清朝末期の１９世紀後半から２０世紀初頭までの時期が対象となるが、先の時代における固有の民族＝文化的モンゴル・アイデンティティ形成と大きな関連しながら、統一独立国家の建設へと向かわせた。

このように本論文は、膨大な歴史記述にあらわれた言葉の概念と用法を、それぞれの歴史的コンテクストで分析し、「文化」と「国家」に対応する二つの大きな概念が、さまざまな言葉の意味の創造と再解釈として交錯しながら、各時代のモンゴル・アイデンティティとナショナリズムを生み出してきたダイナミックな過程を、実証的に明らかにしている。これは、従来の歴史学、政治学などにおけるナショナリズム研究にたいして、あらたな言説分析の手法による実証研究の可能性を示すもので、単なるモンゴル研究としてだけでなく、現代におけるアイデンティティとナショナリズム研究としても、大きく貢献するものである。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　宮　武　公　夫

副　査　　教　授　　煎　本　　孝

副　査　　助教授　　山　下　範　久

学位論文題名

Mongolian Identity and Nationalism Orgin, Transformation and Nature (from thirteenth century to mid-1920s)

（モンゴル・アイデンティティとナショナリズムその創造、変容と性格（13世紀から1920年代半ばまで））

論文審査委員は、以下の経過及び内容で論文審査を行った

第１回審査	平成１５年１２月１９日	論文を審査委員に配布、日程調整
第２回審査	平成１６年１月２７日	論文内容の審査、問題点の検討、日程の調整
第３回審査	平成１６年１月３０日	口述諮問
第４回審査	平成１６年１月３０日	口述諮問の結果及び審査内容の検討、学位授与の可否判定
第５回審査	平成１６年２月９日	報告書の作成と点検

審査の概要

本論文は以下の５章から構成されており、各章の構成、内容、理論的妥当性について各審査委員による詳細な検討、審査が行われた。

序章では、研究の目的と理論的な枠組みとしての、ギアーツ、リクールなどの解釈学、ポーコックやスキナーの言説分析理論、ゲルナーをはじめとするナショナリズム理論の妥当性が述べられ、そののちに、対象とされた歴史記述資料についての説明が行われている。さらに、先行研究としてアトウッドなどのモンゴル研究が批判的に概観され、続いて具体的な資料の分析がおこなわれる。

第１章では、民族・文化的な均質性を持つ統一的な政治体制としての、モンゴル連邦やモンゴル帝国が、チンギス・ハーンなどによって作られた１３世紀から１４世紀が対象とされる。この時期の資料では、モンゴルを帝国内の他の地域と区別するとともに、モンゴルの集合的アイデンティティ形成に「国家」と「文化」が重要であることが強調される。

そこでは、古代の創生神話が語られ、帝国名は「大モンゴル国」（*Yeke Mongqol Ulus*）と呼ばれる。

第２章では、モンゴルが明に破れ分裂割拠となった１５世紀から１７世紀が対象とされる。この時代には、モンゴル国（*Mongqol Ulus*）の呼称は政治性を失い文化的なリアリティを示すようになり、継続して語られる創生神話は、モンゴル貴族の出自集団（*oboqtan*）をモンゴル人と同一視する。しかしこの時期にも、チンギス・ハーンや「大モンゴル国」（*Yeke Mongqol Ulus*）の再興を謳った、バトムンフ・ダヤン・ハーンのように、モンゴルの集合的アイデンティティの再解釈が行われている。

第３章では、モンゴルが清朝支配下に入った１７世紀から１９世紀後半の外モンゴルが対象とされる。この時期の対象を「外モンゴル」に限定するのは一般的ではないが、この定義は清朝時代を通じてモンゴル人の呼称として公式に用いられたもので、当時のモンゴル・アイデンティティを理解する上で適当である。この時期にモンゴルは中国による政治的支配を受けたが、清朝の政策によって、出自集団を指す *oboqtan* は、固有の土地に住み、固有の言語や生活様式を持ち、伝統的な支配構造のもとに、共通の祖先を持つ特殊な集団であると理解されるようになる。また、チンギス貴族とラマ教の結びつきが強化され、モンゴル人の国家（*uls*）は、民族＝文化的統一体として再解釈されるようになる。

第４章では、清朝末期の１９世紀後半から２０世紀初頭までの時期が対象となる。この時期には、モンゴル・ナショナリズムが発展して、独立運動が盛んになる。これらは、先の時代における固有の民族＝文化的モンゴル・アイデンティティ形成と大きな関連を持つとともに、人々をアイデンティティと郷土の確保に必要な、統一独立国家の建設へと向かわせた。

以上のように本論文は、膨大な歴史記述にあらわれた言葉の概念と用法を、４つの時代区分それぞれの歴史的文脈で分析し、「文化」と「国家」に対応する二つの主要概念が、さまざまな言葉の意味の創造と再解釈として交錯しながら、各時代のアイデンティティとナショナリズムを生み出してきた過程を、実証的に明らかにした点が高く評価される。その一方で、関連する中国語資料が不十分な点や、解釈学、言説分析理論の理解が不十分な点が課題として残されている。しかし、本論文は従来の歴史学、政治学などにおけるナショナリズム研究にたいして、言説分析による研究の可能性を明らかにして、モンゴル研究としてだけでなく、アイデンティティとナショナリズム研究としても、大きく貢献している。以上の審査結果から、本審査委員会は全員一致で本研究を博士（文学）に相応しいものと認定した。